「女ことば」が衰微してきた」という言説を再考する

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学人文社会科学部 公開日: 2016-09-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 熊谷, 滋子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00009821

「女ことば」が衰微してきた という言説を再考する

熊谷 滋子

1. はじめに

かつてベストセラーとなった坂東眞理子著(2006)『女性の品格』は、職業をもつ女性が現代社会において「品格」をもって生き抜くための指南書である。その中には当然のように、敬語の使い方などを含むことばづかいについても書かれている。男女は平等という前提をおさえながらも、職場では、「まだまだ男性は女性から尊敬されないと居心地が悪い、対等の口をきかれると不愉快だと思える人が多い」(50ページ)という「現実」をふまえ、「です・ます調の丁寧語」を使うのが「安全」だとアドバイスしている。坂東氏は、2001年に内閣府初代男女共同参画局長となった人である。男女平等という建前をうたいながらも、この本が特に「女性」に向けた「品格」について書かれていること、そして、それがベストセラーになったということは、現代の日本社会において女性の置かれた状況がまだまだ不安定なものだということを物語っている。女性は、今でもことばづかいについてアドバイスされる存在なのである。

佐竹久仁子(2005:114-115)は、新聞記事(1949~1999)の見出しからことばに関して抽出したデータベースを調査した結果、特に女のことばづかいについて、「最近、女のことばづかいが男性化・中性化した/乱暴になった」という内容のものが多く、「この50年間、くりかえし、「女のことばの男性化」や「両性のことばの接近」が語られてきている」とまとめている。それは日本語社会において、「〈女ことば/男ことば〉規範」が存在するためであると主張している。つまり、特に女性のことばづかいに注目し、その乱れ、男性化を嘆くのは、日本語社会に〈女ことば/男ことば〉があり、男女それぞれにふさわしいことばづかい、特に女性は男性と違って、丁寧で女らしいことばづかいをすべきだという規範が根強くあるためであると鋭い指摘を行っている(佐竹(2012:53)も同様)。

日本語社会では、他の、特に西欧諸国と違って、伝統的に話し言葉には性差があるということが、一般の人のみならず、言語研究者にも根強くもたれている観念であると思われる。

私自身もそう思い、一片の疑問ももたずに長く、女性とことばについて考えてきた1人である。が、そう考えれば考えるほど、性差のあまりない東北方言を母語とする私は、東北方言が性差をもたない後進的なことば、田舎のことばだという気分にもさせられてしまう。たとえば、東北方言では男女ともに、自称詞として「おれ」「おら」を用いるが、「おれ」は共通語の男性専用であり、女性が用いることには抵抗感が強まっているし、「おら」は、テレビや小説などで東北方言に色濃く結びつけられてしまう、田舎言葉の代名詞になってしまっている。方言と女性の関係については、拙著(2005)「方言の方言化とジェンダー」などでも扱ったが、東北方言は、共通語・標準語からはずれているのみならず、女らしくないという二重のレッテルをはられてしまうことばになっている。東北方言を母語とする若い女性にとっては特に肩身が狭い。鷲留美(2001)では、「女ことば」を規範性をもつ「標準女性語」と規定し、方言や階層という要因から再検討することで、その「権力性」が明らかになっていくことを考察している¹。

そんな折、たとえば渋谷倫子(2006:51)の以下のような主張と出会い、啓発されることになった(なお、拙稿では「女ことば」「女性語」とは、主に終助詞(「～わ」「～だわ」「～だわね」「～の」「～よ」「～こと」)を特徴とするものを想定にしている)。

¹ 女性方言話者の方が二重に抑圧を受けている例として、私の母(岩手出身)のことを思い出す。母が中年のころ、所用で同僚とともに東京にかけた。あるとき、母がコップから水をこぼしてしまって、思わず、「あら、かまけたわ」と言っしまい、大笑いしたという。東北方言で「まける」というのは、「こぼす」という表現である。そこに「あら」「わ」という「標準女性語」をつけて、とっさに東北方言をかくそうとしたものと思われる。「かまける」という不思議な言葉までつくってしまった。東北人は、おうおうにして、都会にでると、このように方言をかくそうとして自ら墓穴をほってしまうのである。

さらにいうならば、方言地域にあっても、男性側が女性にことば遣いのうまさを期待する傾向がある。女性の方が標準語がうまい、もしくは早く習得すると指摘する東北方言地域出身の男性が少なくない(井上史雄(2000)、寺山修司(1969)、金田一京助(1969))。こういう思惑が東北人の間にあること自体に、東北における方言と標準語、そしてジェンダーをめぐる問題が根深いことが感じられる。

女性と方言ということでは、方言学者の藤原与一(1975)は、東北方言の共通語化をすすめるにあたって、方言には男女差がないため、特に女性に対しては、丁寧に話すように、敬語を学ばせる必要性を説くほどである。

フェミニズム言語学の登場以後、現代日本語の女性語の研究は進んだ。しかし会話データ分析に基づく研究の多くは、実際の会話に女性語の使用例が少ないことを踏まえ、「社会の変化と共に「押し付けられた女性像」を拒否する女性が増えた結果、女言葉を使う人が減っている」とするものが多い。この解釈は「もともと日本女性は女性語を使っていた」という前提の上に立ち、「しかし今では使わなくなったのだ」という結論を導いている。しかしこの前提それ自体の真偽は証明されていない。

本稿は、上にあげた渋谷の問いの意味を私なりにより具体的に展開することにある。繰り返せば、日本語には性差があるが、男女平等などの社会的な変化によって、あったはずの「女ことば」が衰微してきた、もしくは女性の話し方が中性化してきたと結論をだす研究が少なくないという言語学者の現実である。その中には、伝統的な日本語の性差が失われ、女性が男のような乱暴な話し方をするようになって嘆かわしいといった、「女ことば」の衰微を残念に感じ、悲観的にとらえる研究もあれば、他方で、「女性に差別的」と思われる「女ことば」が衰微してきたことは、男性に対する女性たちの対等な意識の結果であると理解するような、楽観的なとらえ方をする研究者の見方についてもいえることである。どちらの研究にも、佐竹のいう〈女ことば／男ことば〉規範が根底にあるのではないかと考える。つまり、一般の人のみならず、言語研究者も、このような規範意識が強くあるのではないかということだ。このような、いまだに実証されていないものを前提とした言語学者の言説の社会的な影響は無視することのできないものではないかと考えている。

「日本語には性差がある」という言説は、〈女ことば／男ことば〉規範の上には、日本語を東京・首都圏などの中央におけることば遣いとして単純化し、同質化して語る中央志向の言語イデオロギーであり、さらには、「女ことば」が衰微した、もしくは、男女の話し方が中性化してきたことを男女平等の成果と結びつけることで、世界的にみてあまり進んでいるようには見えない日本における男女平等が達成されているかのような印象をもたせる、「男女平等神話」を助長させてしまう恐れをもっている。ことばについての語りが社会に対する楽観的な見方に与する例だと思われる。中村桃子（2007b：41）のいう「ついで語る」言説である。語ることによって形成された発想である。

本稿でとりあげるべき研究は数多くあるが、紙面の都合上、いくつかに絞って検討する。なお、今回考察するにあたり、研究、もしくは研究者個人を批判

することに主眼があるわけではない。むしろ、これらの研究の蓄積のおかげで、私自身の中にもある、規範意識を明らかにし、「女ことば」についての考え方をさまざまな角度から見つめなおすことが目的である。

2. 「日本語には性差がある」という言説

繰り返し述べてきたが、女性が男性と違う話し方があるとするのは、理由はどうあれ、日本語社会に根強くある言説であり、規範ともなっている。日本語の文法書や論文などで、たとえば、「話し言葉では、男性が主に使う表現と女性が主に使う表現があり、かなり体系的な区別がなされる」(益岡・田窪1992: 222) や「日本語は性差が顕著が言語である」(尾崎1999: 61) など、さらに、「世界中で日本語だけが持つ特長ではないだろうか」(杉本1985: 201) と、日本語の独自性として語ることもある。このような記述にしたがえば、日本語社会では、男女は一般的に性差にそった話し方をしてきた、あるいはしていることになる。が、はたしてそうなのだろうか。私は東北出身であり、性差については、テレビドラマなどのメディアから学ぶしかなく、家族、親戚、友人、教師など周りを見渡しても、これまで接した中で「女ことば」を使う女性に出会ったことがほとんどない。その後、東京出身者とも接点をもつようにもなったが、「女ことば」を使っている女性はいなかった(いわゆる「おネエことば」を話す男性に1人出会ったことがある)。私の経験は特殊なものかもしれないが、「女ことば」と出会う場面がメディア以外になかった。

文法書でいうところの、いわゆる「日本語」とは、どのような「日本語」について語っているのかということである。東北方言にあてはまるとは思えない。関西方言について語っているとも思えない。あるいは、東京といっても、全ての地域なのか、はたまた、いつの時代のことなのか、どの社会階層の女性を使うのか、その他さまざまな要因(どこで使用できるのか、できないのかなど)を念頭に入れると、この「日本語」とは相当限定的なものではないかと推測できる。ちなみに、1930年代初めから1940年代初めに東京で生まれ、青春時代を東京で謳歌してきた男女(男性1名、女性4名)に「女ことば」について簡単なアンケートを試みた。その結果、親や親せき、友人など周りの女性たちが「女ことば」を使うのを聞いたことがないとしたのが男性1名、女性2名、自分は「女ことば」を使わないとしたのが女性3名であった。簡単なアンケートなので確かなことはいえないが、東北出身の私が予想していたよりも東京出身の女性

は「女ことば」を使っていなかったということも確認できた。1933年生まれのある女性は、2016年に開かれた同期会で数人の友人（女性）に「女ことば」について聞いたところ、「下町っ子なので、チャキチャキの下町言葉は使うが、「女ことば」には縁遠かった」というような雰囲気だったという。東京出身の女性でもこのような言語実態である。したがって、「日本語には性差がある」とすると、東京全域を含めた日本全国いたるところの、一般的に使用されている日本語について述べているものになるが、はたしてどうなのだろうか。たとえ東京でのことば遣いとしても、地域や階層、使用場面などかなり限定されたものになるのではないかと考える²。

そもそも「女ことば」は、中村桃子（2007a）のタイトル『「女ことば」はつくられる』が示し、説得的に論証しているように、「つくられたもの」であり、しかも、それらは明治以降であるという。中村氏によれば、明治になり、近代化の波を受け、国民国家形成のために上から標準語が要請され、さらには、その「女版」も要請された結果つくられたものにすぎない。それは、小松寿雄（1988）が証明しているように江戸期とは断絶されたものであり、佐藤春夫（1941：171）が推測しているように、当時の小説家が工夫したものを「読者である女学生や書生などが口真似したもの」が発端になってできたものかもしれない。中村氏などが指摘しているように、当初は、いわゆる「てよだわ言葉」が「下品な言葉遣い」として非難されたのに、のちに、周縁化されたままではあるが、そして、鷲留美（2001）がまとめたように、男性のことばとはことなり、女性にふさわしいものとみなされるものに選別されていき、やがて教科書にも掲載されるほどのおすみつきを得たことばとなっていった。さらに、鷲留美（2000b）が明らかにしたように、昭和初期に、「女房詞と女性のことばを結びつける」ようになり、日本の伝統ある美德をもつ文化の一つとして宣伝されるものとなった。

しかし、渋谷（2006：51）は、「本当に一般の日本女性の間に普及しているのか検証した研究も少ない」と述べている。明治期は録音技術なども今ほど発達していなかったため、自然談話のデータを記録しておくことは難しかったと思われる。したがって、どの程度、「女ことば」が一般的だったのかも、今となっては調べる方法がない。当時の小説や台本などもあり、それが語彙レベル

² その点では、「女ことば」はIrvine & Gal（2000）のいう「想像された言語」ともいえる。また、日本語として一般化して語るのは、Korskrity（2000）の指摘するような「単純化し、同質化し、多様性を削除する」発想である。さらに、鷲（2001a）を参照のこと。

ではあてはまるものもあるかもしれないが、文末表現などについては、当時の話し方をそっくりそのまま反映しているとはいいいにくい。その証拠に、様々な研究から、実際の日常会話では「衰微してきた」と考えられる「女ことば」も、2000年代以降書かれている小説や時代劇などでも堂々と使われている。フィクションでの使用と実際の使用とは、言うまでもないが、無視できないギャップがある（水本光美（2006））。そもそも文芸の世界と実用のそれとは別個のことである。

3. 「女ことば」が衰微してきた」という言説

「日本語に性差がある」という前提にたつて、実際に調査してみたら、「現在は「女ことば」が衰微してきた」という結論が導き出される。「～してきた」とするならば、少なくとも同じような条件で、経年変化をみてみないと証明できない。たとえば、方言研究をまとめた井上史雄（2000）では、方言の共通語化について、鶴岡市で、戦後三回行ってきた上でまとめている。「日本語では「女ことば」が衰微してきた」とするならば、東京や首都圏のみならず、東北や関西を含めた全国地域を対象に、1度限りではなく、複数回行った上でようやく「衰微してきた」という結論を引き出せるのではないだろうか。明治期から少なくとも1960年代ぐらいまでは前述したように録音技術があまり発達してなかったため、自然談話の資料が入手できないのは仕方ない。1回の調査で、「女ことば」があまり使用されていないならば、その調査の範囲内で、「女ことば」が「あまり使用されていない」というまとめになるだろう。それ以前の状況については、あくまで推測として述べるしかないだろう。

3.1. 調査のありかた、結果の解釈について

たとえば、遠藤織枝・尾崎喜光（1998）では、明治初期から平成の期間を対象に「女ことば」を調べているが、具体的な調査としては、明治初期から昭和末期までは、明治期の音声資料は入手できないので書かれたものに頼らざるをえないとし、小説、新聞、演説、戯曲、放送台本、雑誌の座談会などの書かれたものなど70作品を扱い、「実際の話しことばとの乖離は予想されるが、変化の軌跡を見るという目的の範囲内で使う資料としては容認される」（57ページ）とことわり、調査している。一方、平成の調査は、1993年に収集された首都圏の職場での自然談話資料と1997年に実施した東京都在住者への質問形式のアンケー

ト調査である³。

表1 遠藤・尾崎（1998）の調査内容

	調査数	内容	調査期間	対象
小説、シナリオ 座談会	70作品	多様	明治初期～ 昭和末期	書かれたもの
自然談話	19名、首都圏在住 20代～50代の有職女性	職場	1993年	録音された会話
アンケート調査	1013名 東京都在住 20代～60代男女	一般人	1997年	質問形式の調査

結果は、70作品と自然談話資料、そしてアンケート調査ごとにまとめられているが、最終的には、「変遷の大きな流れは、「テヨダウ」の減退に代表されるように、女性専用とされる語の使用の減少の流れでもあった。」(74ページ)と結論づけている。つまり、女性専用表現が「減少」したとしている。

明治から昭和までの書かれた70作品と、1990年代に行われた首都圏もしくは東京都在住者の職場での自然談話調査1回、そして、質問形式の調査1回からみえてくるものはあるだろう。たとえば、作品など書かれたものの範囲内での比較検討は妥当だと考える。その中での変遷は有効だと思われる。しかし、それはあくまで書かれたものの範囲であり、当時の話しことばを部分的に反映しているとはいえ、書かれた「会話」である。一方の、平成での自然談話資料は首都圏の職場で収集された1回のみである。その時点での女性専用表現の使用の状況は、首都圏のその職場の範囲内でのまとめとしては有効だと考えられるが、女性専用表現の使用が「減少した」というには、同様の職場で、さらに10年後、20年後に同様な調査をしてはじめていえることではないだろうか。この職場での自然談話調査については、尾崎喜光（1997）に詳しくまとめられており、「女性専用疑問形式「わね↑」「わよね↑」等や男性専用疑問表現「だな↑」「だよな↑」が衰退したこと、従来女性が主として使うとされてきた女性的疑問表現「名詞+ね↑」「(な)の↑」「のね↑」「ないの↑」等、あるいは男性が主と

³ この調査の質問とは、親しい友達とハイキングを予定しているが、天気予報によると雨らしいということをその友達に電話で伝えるとしたら、どう言うか、選択肢の中から、自分で言うかどうかを尋ねるものである。その選択肢は「雨だよ/だぞ/だぜ/よ/だわよ/降るよ/降るわよ/雨だね/雨ね」である。

して使うとされてきた男性的疑問表現の「かね↑」「かな↑」「だよね↑」等が、男女共通に使う中立的疑問表現の方に移行しつつあることが明らかになっている。男女のことばの性差は年々縮まる傾向にあるといわれるが、こうした実態調査の結果は職場の疑問表現においても性差の縮小傾向を顕著に示すものとなっている(81ページ)と結論づけている。しかし、繰り返すが、1回限りの調査であるため、比較対象がないまま、「衰退した」「縮まる」と解釈することに無理があるのではないだろうか。

また、1997年に実施された質問形式のアンケート調査も、岡本成子(2011:234)が指摘しているように、東京都在住者の「規範」意識を聞く限りにおいては有効であるが、実際にそう話すかどうかは、実際の会話を聞いてみないと確実には証明できない。「規範」意識と実際の使用とはズレが生じていることがよくあるからである。まとめると、「減少した」というにはさらなる経年調査が必要であり、東京や首都圏だけを対象とするならば、その地域のことばづかい、一種の東京地域の方言の調査をしているにすぎない。日本語についての状況を調べるならば、日本列島全体を網羅するような調査が必要となるだろう。また、規範意識をみる調査は、あくまでその人の規範的な意識を聞いているのであり、実際にその人が調査結果のように話しているかどうかは不明である。

過去と現代を比較した研究は、遠藤織枝(2004)にもあてはまる。そこでは、1937年から1945年に放送されたラジオドラマの台本25冊と、2000年に放送された日本のテレビドラマ「ビューティフルライフ」と、現代日本語研究会編(2002)で取りあげた首都圏の職場での自然談話資料(主な男性協力者21名を含む)を比較検討している。

表2 遠藤(2004)の調査内容

	調査数など	内容	調査期間	メディア
ラジオ台本	25冊	多様	1934~1945	ラジオ
テレビドラマ	1作品	恋愛	2000	テレビ
自然談話	首都圏、20代~50代の有職者	職場	1999~2000	録音

ラジオドラマの台本の分析では、終助詞のみならず、応答詞、動詞、語彙など多岐にわたり、戦時中のドラマ台本におけることばづかいを丹念にしている。性差に関して、ラジオ台本において、「当時の話しことばには性差が大きい

こと」「敬語使用の面ではっきりと性差が表れていた」ことがわかったとし、以下のように述べている。

最近の社会言語学的アプローチや、語用論の研究などから、実際の日本語に性差は減少してきていると、多くの実証的研究の報告が出されてきているにもかかわらず、「わ」、「の」、「かしら」などが、女性専用の終助詞として辞書や日本語概説書などに特記され、「ぜ」、「(だ)い」など現在ではほとんど使われなくなった語が男性専用として特記されているが、それは、こうした40年代の性差が顕著であったころの日本語の状況をそのまま引き継いで論じられてきた結果ではないかと考えられるに至った。(2004: 62)

ラジオドラマの台本をてがかりに、実際の日常の話しことばが、1940年代では性差が顕著であったと推測しているが、台本に書かれた「会話」から、このような結論を導くことはできるのだろうか。2000年代の今でも、ラジオドラマに限らず、フィクションでの会話、たとえば、小説、映画、翻訳作品やインタビューの翻訳などでは性差が顕著なものが少なくない。だからといって、現代の普段の会話において、性差が顕著とはいえないだろう。

さらに、重箱の隅をつつけば、現代の若者向けの恋愛を扱ったテレビドラマのセリフと職場での自然談話を、戦時中のラジオドラマの台本と比較するのは、その扱うテーマや場面、時代などの点からいっても少々乱暴すぎないだろうか。ラジオやテレビ、フィクションと自然談話、扱う内容（恋愛、職場）など、比較対象の条件が統一されていない。また、ラジオドラマの台本に書かれた「会話」が実際に使用されているかのように分析しているところもある。たとえば、ラジオドラマの台本に、「こっちへ来たまえ」という表現があるが、現代のテレビドラマや職場の資料にはみられないことから、「この補助動詞は、「台本」の時代には一般的に使われたが、現在では消滅したと言えそうである」(34ページ)とまとめている。しかし、1930年東京下町生まれのある男性に、親や周囲で「～たまえ」を使っているのを聞いたことがあるかと尋ねたところ、一度もないということだった。ちなみにその男性の父親は、今でいえば上級公務員である。ここでいいたいのは、「～たまえ」が当時全く使われていなかったというのではなく、それほど「一般的に」使われていなかったという可能性もあるのではないかということである。ちなみに、金水敏(2003)のいう、典型的な博士語の1つとして、現代のフィクションでも「～たまえ」は使用されてい

る。

つげ加えて、台本での「会話」が必ずしも当時を反映していないことは周知のことであるはずだ。2016年1月から放送されているNHK大河ドラマ「真田丸」は、真田幸村（16世紀から17世紀）の半生を扱っているが、そこに登場する若い女性たちが「女ことば」を使用している（特に、きりという名の女性は「～わよね」「～わ」などを頻繁に使用している）。「女ことば」は明治以後つくられたものだから、いくら台本で使われているからといって、当時の若い女性が使用していたとは考えられないだろう。本ドラマの脚本をてがけた三谷幸喜は、会話を作成する上での苦労を述べている。「実際に真田信繁や徳川家康がどんな言葉をどんな風に喋っていたかは、想像するしかない。手紙は残っていても、書き言葉と話し言葉は別」と書いている（2016年1月28日付「朝日新聞」）。

以上、「女ことば」は衰微してきた」という言説についてみてきたが、一方で、逆の流れ、つまり、方言の性差化が進んでいると思われる実態もある。それは、方言話者の意識に共通語（標準語）の性差が入り込んでくることである。たとえば、福島県立南会津高校の生徒が作成した『オレオレ詐欺!?』（NHK教育テレビ、2007年8月13日放送）というビデオ作品は、共通語（標準語）では男性専用とされる自称詞「おれ」を、東北方言では女性も使用することの「是非」をユーモアたっぷりにまとめている。同級生、教師、家族などへのインタビューやアンケート調査などが紹介され、女子高校生が「おれ」を使うのは、本心を伝えるものではあるものの、広く社会へ出ていくためには、共通語（標準語）の自称詞「わたし」も使えるようになるべきだと結ばれている。その中で、ある女子高校生が、自分の母親と祖母に、「おれ」の使用についてインタビューしている。祖母は、なにも問題だと思ったことはなく、いつでも「おれ」を使ってきたこと。母親は、高校時代までは「おれ」以外使わなかったが、結婚してから、家の中では「おれ」、外では「私」と使い分けられるようになったということである。娘である女子高校生は、高校生にしてすでに「おれ」が共通語（標準語）では男性専用で、女性が使うのはまずい（女らしくない）ということを自覚している。だから、ビデオのテーマにもなったのだ。とすれば、共通語の絶対的性差である「おれ」が、祖母から母、そして、娘世代になるにつれ、その使用をためらうようになってきたという流れは、むしろ、ある意味で方言が性差化してきた、「女ことば」化してきたということを示している（鷲（2001：9）でも、自称詞について同様の指摘がされている）。この流れについては、どう考えるのだろうか。

3.2. 意識調査について

尾崎喜光(2004)は、東京都在住者(20代から60代)に対して、以下のような意識調査を実施している(54ページ)。

日本語では、男の人は「そうだぞ」、女の人は「そうよ」というように、言葉の最後が男女で変わります。ところが最近では、男も女も「そうだよ」と言って、男女の区別がなくなってきていると言われていています。これについてどう思いますか？

1. これまでのように区別があった方が良い。
2. 区別がなくなってもかまわない。
3. 区別がなくなった方がむしろ良い。
4. わからない。

結果は、若い年齢層(20代)ほど「区別がなくてかまわない」とする割合が高くなっており、「言葉の男女差が縮小することを良しとする方向に大きく移り変わりつつある」(55ページ)とまとめている。今回の調査は、「日本語には性差があり、最近はその区別がなくなってきている」という調査者の前提や思惑が、質問内容や選択肢に表現されている。したがって、若い世代になるにつれて、「区別がなくなった方が良い」ことがいいような気がしてくるのではないだろうか。一方で、若い世代が普段よく接するアニメやゲーム、小説、映画などに登場することは遣いにはかなり男女の区別があると思われるが、その点について、その世代はどう感じているのだろうか。「男女差の縮小を良しとする方向」ならば、今の作品も当然そのような流れになっているはずだ。

3.3. 世代差について

調査した結果、ある表現について、世代が若くなるにつれて次第に使用しなくなっているということから、その使用が「減少」「衰微」してくるという解釈は妥当だと思われる。しかし、その解釈も背景を考慮して行う必要がある。

遠藤・尾崎(1998:67)では、職場での自然談話資料をもとに、終助詞「ワ」の使用を20代、30代、40代、50代で比較している。そこでは、「終助詞「ワ」は確かに現在でも使われていることが確認される。(中略)恐らく「ワ」の使用は衰退に向かっており」(67ページ)とされている。しかし、調査をまとめた図では、20代(28.5%)30代(30.0%)の方が、40代(22.2%)、50代(14.2%)よ

りも使用率が高い。この数字からどうして、「衰退」しているといえるのだろうか。

また、尾崎(1999:64)では、質問形式の調査(「雨が降る」の言い方)の結果、女性形式(「雨よ／ね／だわよ」「降るわよ」)の使用率が低くなっているため、「急速に衰退に向かっている」としている。しかし、氏が示している図をみると、確かに、一番使用しているのが50代ということがわかるが、60代では、ものによっては、30代、40代と同程度しかないものがある。そのことはどう説明するのだろうか。

横田貢(1977)は、当時30代、40代の東京都下町在住の中流層の女性20人を対象に質問形式の調査をした結果、「わ」の使用者率は九割以上であったという⁴。それらの世代が、尾崎(1999:65)における1997年の調査時の50代、60代にあたり、「わ」は昭和30年代が普及のピークであると結論づけている。「仮にこうした形式が個人に定着するのが一〇代後半とすると」、尾崎の調査の50代にあたるとしている。どうして、このような形式が10代後半に定着するといえるのだろうか。また、いずれの調査も質問形式のものであり、繰り返しになるが、規範意識の変化をみる限りでは有効だと思われるが、実際に使用していたかどうかについては別問題である。さらに、横田氏の調査は「下町」「中流層」の女性を対象とし、面接調査をしている。一方、尾崎氏の調査は「無作為」に選んで郵送で調査している。その点で、調査対象の絞込みや調査方法について、必ずしも統一されているものではないため、単純に比較することができるのか疑問が残る。

さらに、世代をめぐる尾崎氏の解釈に対して、別の解釈として考えられるのは、若い世代より、年上の世代の使用率が高い理由として考えられるのは、若いころは使わなかったが、社会人になって使用するようになったということもあるはずである。前章であげた福島的女子高校生のインタビューで、母親が結婚後、自称詞として「おれ」だけではなく、外では「わたし」を使用するようになったという例がある。

⁴ そのでの調査項目は、敬語、女房詞(例、おひや)、終助詞の3つである。特に本稿に関わる終助詞の調査項目をあげる。親しい人と話をする場合、1. それでは頼むワ 2. 頼むワネ 3. 頼むワヨ について、よく使う、時々、使わないかどうかを聞いている。

4. 「男女平等になったため、「女ことば」が減ってきた」とする言説

「女ことば」「女性語」が減少、あるいは、衰微し、女性のことば遣いが中性化してきた、性差がなくなってきた要因として、その多くが男女平等をあげている。

本稿の最初のあたりで紹介した佐竹(2005:115)は、男女のことばづかいの変化の原因として、「[男女平等、男女同権の社会ということで、女のことばが男性化した／両性のことばが接近した]という言説パターンは、50年間かわらず存在し続けている」と批判的にまとめている。50年間、一般の人々も研究者もこう考えてきたことがあらためて確かめられる。遠藤織枝(2002:48)によれば、石黒修(1943:231-233)が「女子教育の普及により」「女性語はだんだん中性化し、男性化されようとしてゐる」と述べており、「女性語の「中性化」を観察した最初のものではないか」と指摘している。1980年以降でも、杉本つとむ(1985:198)は、明治以降、女性が解放され、「男女平等とは、ことばの面でこうした男性寄りの路線をひた走りに走ることであった」とまとめている。杉本(1985:207)は、敗戦後は、「女のたしなみ、ものやわらかさがなくなり、粗野」になったと嘆いている。しかし、心理的、生理的な差は残るだろうから、ことばの上でも男女差が全てなくなることはないと期待している。しかしながら、ことばの次元で性差が解消していくことと、男女平等論議の次元の問題とは、関係があるとはいえ区別して論じるべき事柄である。こういった論調が以下でみるように、過去においても現在においても絶えることがない。

吉岡泰夫(1994)では、1993年に、肥筑方言域で、10代、20~30代、40~50代、60代以上の男女それぞれ1名ずつに、カジュアルな場面とフォーマルな場面を想定して会話をしてもらい調査をしている。これは主に音韻、語彙レベルでの調査であり、終助詞ではないが、東京や首都圏以外での調査ということで意義がある。吉岡は、調査結果を、「若い世代の言語行動において性差が縮まっていることは、性別役割構成、職業構成の変化と無関係ではないだろう」(34ページ)と結論づけている。方言地域においても、「性差が縮まっている」と指摘しているが、細かく読んでいくと、「明確な性差が現れるのは三十代」(39ページ)と述べたり、フォーマル場面では「若い女性、特に二十代女性が表現処理レベルの高い敬語形式をもっとも多く使用する、敬語習熟が進んだ社会集団である」(40ページ)と指摘している。確かにデータではそうなっている。そうであるならば、むしろ、若い世代の女性について、性差がはっきりとし、より丁

寧な表現を用いていることになり、「性差が縮まっている」とはいえないようである。そもそも、調査対象が各世代男女それぞれ1名であるため、今回の結果も、結局は、個人差かもしれないという印象さえもちかねない。

金水敏(2003)は、位相語と役割語を区別し、「言葉の位相(差)は、「現実」(リアリティ)における様相・差異を学者が研究することによって得られるのに対し、役割語は、私たち一人一人が現実に対して持っている観念であり、いわば「仮想現実」(ヴァーチャル・リアリティ)なのである」(37ページ)と説明し、役割語は、現実には使用されるものではないことを強調している。しかし、女性の言葉については、「役割語とも捉えられるし、現実の位相差としても存在するような言葉づかい」(38ページ)と述べつつ、「現実には女性特有表現の使用頻度は驚くほど小さい」(38ページ)と、現実での使用の少なさを指摘している。その理由は、敗戦後、大学の男女共学制で、「基本的に男女の垣根が取り払われた」こと(163ページ)、「教育権、参政権、労働条件等で男女間の格差が次第に少なくなり、男女共同参画社会が理想として求められている現在」(166ページ)、女性専用表現が衰微しているのは当然としている。金水も、「衰微」してきた理由が男女平等のためだとしている。

小林千草(2007)は、そのタイトル『女ことばはどこへ消えたか?』が示す通り、かつては「女ことば」があったのに、「戦後、アメリカの教育方針がとり入れられ男女平等が叫ばれ」「ほとんど男女差によることばづかいがなくな」(15ページ)ったことを残念に感じている。本書で具体的にあげられる「女ことば」は、夏目漱石の小説と女房詞と関わらせるために『浮世風呂』での会話と、さらには、氏の個人的体験で展開されている。比較対象の現代については、2001年に大学生を対象に調査した結果、「中性化している若者のことば」(216ページ)とまとめている。しかし、この調査は「女ことば」というより、「若者ことば」(~じゃん、やっぱ、きもい等)の使用についてであり、少々調査のテーマがずれている。

「一〇〇年前は女ことばが“あった”と確信できる時代であった」(21ページ)とし、その理由は、夏目「漱石が頭の中で女ことばを構成していったのではないこと、わが妻とのコミュニケーション、妻と第三者との会話を観察しつつした上で、文字化していったことを確信するに至った」(28ページ)ようだが、すでに紹介した佐藤春夫氏がいみじくも書いていたように、若い女性にふわさしいことば遣いあまりなかった当時の、「小説家の工夫」かもしれず、それが、一部の女学生、一部の地域、あるいは、投書・手紙などの書きことばでの会話

などでしか使われてこなかったという認識ないし、言説については、小林氏はどう考えるのだろうか。日本全国で一般に使われていたということ、小説の会話以外でも実証が可能だろうか。著者は京都生まれということだが、京都でも「女ことば」が一般に使われていたのだろうか。

5. おわりに 男女平等とことばづかいの関係

「女ことば」は男女平等のおかげで衰微してきたという考えにたてば、話しことばに性差がないほうが平等な社会ということになるだろうか。「女ことば」が明治以後につくられたものとするなら、それ以前の方が、男女平等な社会だったということがいえるのか。あるいは、性差のあまりない方言地域の方が、性差のある方言地域の方よりも、男女平等な社会といえるのだろうか(山口幸洋(1991)、名嘉真三成(1991)を参照のこと)。「女ことば」の時代による使用の変遷と、男女平等社会との関連づけについては、さらなる吟味が必要となるのではないだろうか。

その上で、日本は、第二次世界大戦の敗戦後、男女平等の社会を希求してきたと語られてきているが、はたして、どれほど実態として、男女平等社会になっているのだろうか。世界との関わりでみると、世界経済フォーラムが毎年出しているジェンダーギャップ指数では、2015年の段階で、145カ国中101位である。決して、男女平等になっているわけではない。安心して男女平等社会といえるには程遠い現実だ。

本稿での結論を再々度にわたるが、確認しておきたい。はたして「女ことば」は実際に日常生活の会話で一般的に広く女性たちが使っていた(る)ことばなのだろうか?もし、単に、ある時期、東京の一部の女性たちにしか使用されてこなかった、もしくは使用されていないとすれば、これは、単に、東京方言の一種であり、東京方言には性差があると言えさすむことである。現に、小松寿雄(1988:94)は、冒頭で「東京語には、男女差がある」と述べている。

最後に、これまで何度も参照させてもらった佐竹(2005:119)からの引用で閉じたい。「敗戦によって、日本の政治や社会の制度は大きく変わったが、〈女ことば／男ことば〉規範については、戦前と戦後の断絶はみられないといってよい」「日本語は性差の大きい言語で〈女ことば〉と〈男ことば〉がある」という言説が繰り返されて常識化し、てしまったと氏は強調している。日本語に性差があることを前提とし、それ以外の言語使用は逸脱、例外とみなし、「常に

「最近の〈変化〉」として指摘される」と結論づけている。本稿はこの主張を全面的に支持している。こういった性差規範は特に女性にきつくあたる。そのため、たとえば、女性の東北方言話者が自分のことを「おれ」「おら」と言うのをためらわせる圧力を生みだす。このような日本語に性差があるという発想は、なにも一般の人のみならず、今回みてきた研究の前提としても根強くもたれている。私自身にもあるものである。今回、ここでとりあげた女性のことば遣いの研究に対して、時に、重箱の隅をつつつくような書き方をしてしまったことなど、反省すべきことは多々あることは承知している。なによりも、本稿は私自身がこだわってきたことへの懺悔録である。

参考文献

- 石黒修 (1943)『美しい日本語』光風館
- 井上史雄 (2000)『東北方言の変遷』秋山書店
- 遠藤織枝 (2002)「『女性語』という思想」『ことば』23号、40-58
- 遠藤織枝 (2004)「戦時中の話しことばの概観—現代語と比較しながら—」『戦時中の話しことば—ラジオドラマ台本から—』ひつじ書房 27-64
- 遠藤織枝・小林美恵子・高崎みどり (1999)『颯爽たる女たち—明治生まれ—ことばで綴る100年の歴史』梨の木舎
- 遠藤織枝・尾崎喜光 (1998)「女性のことばの変遷—文末・コト・テヨ・ダワを中心に—」『日本語学』7-5 56-79
- 岡本成子 (2011)「言葉とジェンダー研究の新たな展開」『日本語学』30-14、232-243
- 尾崎喜光 (1997)「女性専用の文末形式のいま」『女性のことば・職場編』ひつじ書房 33-58
- 尾崎喜光 (1999)「女性語の寿命」『日本語学』18-9 60-71
- 尾崎喜光 (2004)「日本語の男女差の現状と評価意識」『日本語学』23-7 48-55
- 金水敏 (2003)『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店
- 金田一京助 (1969)「盛岡弁とアイヌ語研究」『言語生活』210 筑摩書房 81-86
- 熊谷滋子 (2005)「方言の方言化とジェンダー」『社会文化研究』8:92-114
- 熊谷滋子 (2010)「方言の歴史」中村桃子編著『ジェンダーで学ぶ言語学』世界

思想社 50-65

- 現代日本語研究会編 (1997)『女性のことば・職場編』ひつじ書房
現代日本語研究会編 (2002)『男性のことば・職場編』ひつじ書房
小林千草 (2007)『女ことばはどこへ消えたか?』光文社新書
小松寿雄 (1988)「東京語における男女差の形成—終助詞を中心として—」『国語と国文学』65-11、東京大学国語国文学会 94-117
佐竹久仁子 (2005)「〈女ことば／男ことば〉規範をめぐる戦後の新聞の言説—国研「ことばに関する新聞記事見出しデータベース」から」『阪大日本語研究』17 111-137
佐竹久仁子 (2012)「〈女性語〉の形成と衰退」『日本語学』31-7, 44-55
佐藤春夫 (1999 [1941])「国語の醇化美化」『定本佐藤春夫全集 第22巻』臨川書店 166-177
渋谷倫子 (2006)「日本語における「近代的」セクシュアリティの形成」『ジェンダー史学』2 49-61
杉本つとむ (1985)『女のことば誌』雄山閣
寺山修司 (1969)「座談会 わが母のことば“東北弁”」『言語生活』210 筑摩書房 2-16
名嘉真三成 (1991)「方言にあらわれた男女差—琉球方言」『国文学解釈と鑑賞』56-7 至文堂 59-69
中村桃子 (2007a)『「女ことば」はつくられる』ひつじ書房
中村桃子 (2007b)『〈性〉と日本語』NHKブックス
坂東真理子 (2006)『女性の品格』PHP新書
藤原与一 (1975)『方言生活指導論』三省堂
益岡隆志・田窪行則 (1992)『基礎日本語文法—改訂版』くろしお出版
水元光美 (2006)「テレビドラマと実社会における女性文末詞使用のずれにみるジェンダーフィルタ」『日本語とジェンダー』日本語ジェンダー学会編、73-94、ひつじ書房
山口幸洋 (1991)「方言における男女差—東日本方言」『国文学解釈と鑑賞』56-7 至文堂 71-77
横田貢 (1977)「続東京下町女性語管見—その変化の一様相」『東京成徳短期大学紀要—〇号』45-58
吉岡泰夫 (1994)「若い女性の言語行動」『日本語学』13-10, 33-44
鷺留美 (2000a)「言語政策における「女性語」」『日本ジェンダー研究』3 59

鷺留美 (2000b) 「女房詞の意味作用—天皇制・階層性・セクシュアリティ」『女性学年報』21 : 18-35

鷺留美 (2001) 「「女ことば」と権力—「少女」雑誌の言葉から見えるもの—」『女性学』9 : 6-24

Inoue, M. (2004) Gender, Language, and Modernity: Toward an Effective History of "Japanese Women's Language" in Okamoto, S. and J.S. Shibamoto Smith eds. *Japanese Language, Gender, and Ideology: Cultural Models and Real People*. Oxford University Press 57-75

Irvine, J. & S. Gal (2000) Language Ideology and Linguistic Differentiation. in Kroskrity, P. ed. *Regimes of Language: Ideologies, Politics and Identities*. School of American Research Press 35-83

Kroskrity, P. (2000) Regimenting Languages: Language Ideological Perspectives. in Kroskrity, P. ed. *Regimes of Language: Ideologies, Politics and Identities*. School of American Research Press 1-34